

ダンシング・セブンティーン

グループ・サウンズ (GS) は日本における 1960 年代の音楽カテゴリーの名称で和製英語である。60 年代における大きな社会・経済現象の一つだが、音



乐的な定義には曖昧な部分が多い。これは「グループ・サウンズ」が音楽のカテゴリー (ジャンル) そのものを直接定義するものではなく、形態や様式やその流行を総称したことが大きく関係している。

そのため歌唱を伴うロック形式のコンボ (小編成のバンド) であることが基礎的な条件である以外に音楽の構造的な共通点や行動指向についての定義は判然としない

部分が多くみられる。

直接の背景にあるのはザ・ビートルズをはじめとするリヴァプール・サウンド (≒マーギー・ビート) ≒ブリティッシュ・インベイジョンという英国発の音楽の潮流である。

現時点から考察すると、当時は音楽だけでなく文化全般について、情報の誤りや不足、遅れ、偏りといった交錯や揺らぎもあり、そこからの誤謬や臆見が多くみられる。名称やその表記、カテゴリーの定義やその精度も低く曖昧な部分が多い。歌謡曲においては時代により用語やカテゴリーの意味や使用方法も都度変化するが、大衆向けの商業音楽なのでそれは当然ともいえる。本稿では当時の表記や記述、認識については大きな問題がないものについてはそのまま採用する。明らかに事実誤認と認められる場合は説明して修正する。

リヴァプール・サウンドも和製英語である。ザ・ビートルズを筆頭に 60 年代中期にアメリカビルボードでのヒット・チャートを席捲した「ブリティッシュ・インベイジョン」= 英国発のビート・バンドの総称ということになる。リヴァプールは人口 50 万人ほどの英国 (イングランド) 第 3 の都市で、ザ・ビートルズの出身地である。ザ・ビートルズのライバルと目されたザ・ローリング・ストーンズはロンドン出身で、ザ・フーを筆頭にキンクス、デイヴ・クラーク・ファイヴ、ゾンビーズもマンフレッド・マンもロンドンである。ハーマーズ・ハーミッツ、ザ・ホリーズはマンチェスターのバンドで、スペンサー・デイヴィス・グループやムーディー・ブルースはバーミンガムである。リヴァプール出身はジェリー & ザ・ペースメーカーズ、スウィング・ブルー・ジーンズくらいだろうか。

ロカビリー旋風はエルヴィス・プレスリーの日本版で、グループ・サウンズはザ・ビートルズの直接の影響ということになるが、もう少し詳しくみると、日本ではザ・ビートルズの前に「エレキ・ブーム」というインストゥルメンタル音楽の熱狂的な流行がある。インストゥルメンタル音楽である = 歌唱を伴わないことから「歌謡曲」の歴史からは見落とされてしまうことがあるが、グループ・サウンズの誕生にきわめて重要な位置を占める。

エレキ・ギターを主楽器とする「テケテケ」というグリッサンド奏法と「ジャアアア〜ン」というトレモロ・アームによる独特のリヴァーヴ・サウン



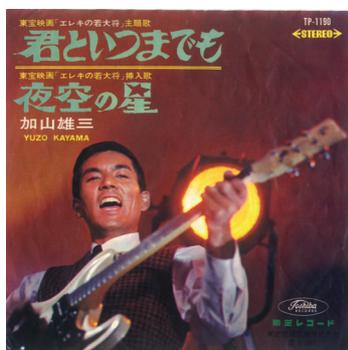
ドはそれまでに聴いたことのないまったく新しい音楽として瞬間に若い聴衆の心を捉えることになる。

最初のきっかけは 1964 年 4 月に発売されたアストロノウツの「太陽の彼方に」だった。「♪ ノツテケ ノツテケ 乗ってけ サーフィン」というタカオ・カンベによる日本語詞の藤本好一の歌唱によるカバーも 5 月に発売されているが、アストロノウツ盤が大ヒットする。続いてザ・ベンチャーズの「パイプライン」が 7 月に発売され、これはシャンティズのカヴァー・ヴァージョンだが、日本ではザ・ベンチャーズの大ヒットとなる。ザ・ベンチャーズは「10 番街の殺人」「急がば廻れ (Walk, Don't Run)」も続けてヒット。翌 65 年 1 月にはザ・ベンチャーズとアストロノウツの合同による来日公演も開催されて、ザ・ベンチャーズはその勢いも借りて「ダイヤモンド・ヘッド」もヒットする。橋幸夫のエレキ歌謡第 1 作目となる「恋をするなら」(詞・佐伯孝夫/曲・吉田正) は 64 年 8 月発売である。

英国発のシャドウズはクリフ・リチャードのバック・バンドを務めながら自身は「アパッチ」等のインストゥルメンタルの作品を多くリリース。スウェーデンのスプートニクス「霧のカレリア」やフィンランドのザ・サウンズの「さすらいのギター」も大きなヒットとなる。

米国発のサーフ・インストとヨーロッパのエレキ・インストが次々と紹介されて勢いをつけた「エレキ・ブーム」を受けて 65 年夏には『勝ち抜きエレキ合戦』(フジテレビ系列) という週間テレビ番組が始まる。これは楽器メーカー主催の『ギャートーン全国アマチュア・ハンド・コンテスト』の延長にあり、ライバルのテスコ社による『テスコ・エレキ合戦』(東京 12 チャンネル) 等





が大きな人気を博して日本でもアマチュア・バンドが続々と誕生する。決定打となったのは加山雄三主演の映画『エレキの若大将』(東宝)で65年12月公開のお正月映画として大ヒット。ここで主題歌&挿入歌として制作されたのが「君といつまでも」と「夜空の星」である。

エルヴィス・プレスリーをモデルとするロカビリー・ブームはソロ歌手+バック・バンドによって成立する。第1回のウエスタン・カーニバルに出演したのはスイング・ウエスト、ウエスタン・キュラバン、オールスターズ・ワゴン、クレイジー・ウエストの4バンドで、それぞれのバンドに「専属歌手」が3~4人いて、かつその中の序列が決まっていた。ロカビリー三人男とよばれた山下敬二郎、平尾昌章(のちの平尾昌晃)、ミッキー・カーチスもそれぞれバンドに所属していた。重要なのはバンマスと呼ばれたリーダーで、その後の歌謡曲シーンの中で大きな存在となる芸能プロダクションの多くは、ロカビリー・バンドのリーダーが興したものである。

エレキ・インストバンドも多数登場する。国産の「エレキ・バンド」として有名なのは寺内タケシとブルー・ジーンズ、井上宗孝とシャープ・ファイブ、加山雄三とランチャーズといったところで、GSの始祖となる田辺昭知とザ・スパイダース、ジャッキー吉川とブルー・コメッツも初期の記録にはエレキ・インスト曲が多数ある。

ザ・ベンチャーズの64~65年の日本における人気はザ・ビートルズを遙かに凌ぐ圧倒的なものだった。一方で、国産の「エレキ・インスト」はレコードとしての大ヒットがない。これは歌唱=歌詞を伴わないことが大きな要因である。つまりザ・ベンチャーズと日本のバンドの音楽に根本的な差異がないので聴き手に「国産」を選択する理由が見あたらないということである。例外的に寺内タケシとパニーズの「運命」や「津軽じょんがら節」があるがGS全盛期の67年の発売なのでエレキ・ブームとは無縁でグループ・サウンズ=パニーズとしてのヒットである。

ロカビリー旋風のあとを受けたアメリカン・ポップスをレコード・ビジネスとして成立させたのがカヴァー・ポップスだった。ユニー・フランシスの「♪

Pretty little baby yah yah」という英語を中尾ミエが「♪可愛いベイビー ハイハイ」と日本語で歌い、弘田三枝子が「バケーション」を「♪ギラギラと輝く 太陽背にうけて」と元気に歌い、飯田久彦が「♪あの娘はルイジアナ・ママ」と笑顔で歌うことのわかりやすさ=日本語化がアメリカン・ポップスがお茶の間にまで浸透してヒットした理由である。

そして、それをより進化させてオリジナルとして成功したのが、坂本九の「上を向いて歩こう」と続くザ・ピーナッツの「ふりむかないで」である。この2曲の登場は歌謡曲史上、きわめて重要かつ意義深いものである。

「エレキ・インスト」は洋楽における日本語:英語という言葉の障壁が介在しないのでローカライズして国産のヒットを出すきっかけが見つけられなかったが、そこに登場するのが「エレキ歌謡」である。つまり「エレキ・インスト」という爆発的な人気の新たなサウンドの歌謡曲=日本語化である。歌=歌詞があるので、インストに比べて、感情移入がより促進される。

前述の橋幸夫は「恋をするなら」以降、64~65年にかけて「チェッチェッチェ」 「あの娘と僕(スイム・スイム・スイム)」といったヒットを連発。驚くべきことに、橋幸夫は自身の歌唱スタイルをまったく変えずにエレキの流行を外形的に取り入れていて、吉田正=ビクター歌謡の真髄をみせる。つまり「潮来笠」と「恋をするなら」の歌唱にはまったく差異が無いのである。一方で御三家唯一のロカビリアン出身の西郷輝彦は「星娘」「恋のGT/西銀座五番街」でその歌唱の本質=8ビートを明確に提示している。そして、何より重要なのはどちらもヒットしたことで、これは歌謡曲の潜在的な購買層の大きさを顕著に示している。若い世代に熱狂的な人気を得た新たなサウンドであるエレキをローカライズした「エレキ歌謡」の成功が「エレキ・ブーム」のひとつの結果なのである。

そして、それらの諸要素を内包して登場したのが加山雄三である。自身がモズライトのエレキ・ギターを演奏しながら歌い、かつ自身が作曲するというまさにスーパー・スターの誕生である。大事なのは「歌いながら演奏する」のではなく「演奏しながら歌う」のである。エレキ・ブームの意味や成果は「君といつまでも」と「夜空の星」の2曲にすべては凝縮されている。

グループ・サウンズの最初のレコード作品は1965年5月10日発売の田辺昭知とザ・スパイダースの「フリフリ」(詞曲・かまやつひろし)で、続く寺内タケシとブルー・ジーンズの「ユア・ベイビー」(詞・安井かずみ/曲・加瀬邦彦)が65年8月20日。当時の認識ではエレキ・バンドが歌も歌ったという反応である。ジャッキー吉川とブルー・コメッツ「青い瞳(英語盤)」(詞・橋本淳/曲・井上忠夫)が翌66年3月の発売。こちらは和製ポップスのバンド仕様という枠組みだが、3曲とも「今までと違う新しい」何かを秘めていた。

ロカビリーやカヴァー・ポップスではすでに旧く、最新のエレキでもエレキ歌謡(リズム歌謡)でもない、加山雄三が部分的に切り拓いた「新しい何か」は、ザ・ビートルズの音楽的革新性とその活動形態にすべてが由来している。





リヴァプール・サウンドの日本化という新たな潮流の始まりである。

ザ・スパイダースの「フリ・フリ」はモンキー・ダンスという当時の流行を取り入れたリズム歌謡の企画に類するものだが、テレビ出演もありヒットの兆しをみせた。「ユア・ベイビー」は加瀬邦彦がザ・ビートルズの音楽的影響下で作曲した楽曲で、『WITH THE BEATLES』の「It Won't Be Long」に大きくインスパイアされたと思われる新たなサウンドを提示したが、セールス的には振るわなかった。「青い瞳（英語盤）」は和製ポップス＝英語詞で『ザ・ビートルパレード』での知名度と演奏もあり話題を呼んだ。ただちに日本語盤が制作され7月10日に発売され大きなヒットとなる。

加瀬邦彦はザ・ビートルズの音楽的革新性を日本において最も早く最も忠実に理解し、自身の音楽に取り入れた音楽家である。以下は私の著書『歌謡曲』（2011年岩波新書）における加瀬邦彦についての記述である。少し長いが引用する。

「ザ・ビートルズ日本公演のオープニング・アクトに決まった寺内タケシとザ・ブルー・ジーンズのギタリスト加瀬邦彦が、「客席でビートルズをみたい」という理由でグループを脱退したことは知られている～中略～歌謡曲への8ビートの導入はカヴァー・ポップスを経由しつつも、アメリカン・ポップスをモデルにして宮川泰が確立しつつあった。ただし、その時点での主体はメロディー・ラインであって、コード進行はその副産物であり、リズム・セクションやビートの本質までは追求されていなかった。宮川泰は加瀬邦彦の処女作「ブルー・ジーン NO.1」を聴いて、そのコード進行の楽理が理解できずにいたという。そして加瀬邦彦がデタラメ英語を口ずさんで、コード進行からメロディーを発見していくのを目の当たりにして、宮川泰が大きな驚きを覚えたことを加瀬邦彦が著書「ビートルズのおかげです」で述懐している。1965年夏のことである。」

「フリ・フリ」「ユア・ベイビー」「青い瞳」の3曲によってグループ・サウンドは始まる。1966年の関連作品の発売は下記になる。

- 年/月/アーティスト/タイトル/作詞/作曲/編曲/メーカー
- 1965/12/ 加山雄三 / 君といつまでも / 岩谷時子 / 弾厚作 / 森岡賢一郎 / 東芝
- 1965/12/ 加山雄三 / 夜空の星 / 岩谷時子 / 弾厚作 / 寺内タケシ / 東芝
- 1966/1/ 西郷輝彦 / 西銀座五番街 / 米山正夫 / 米山正夫 / 重松岩雄 / クラウン
- 1966/2/ ザ・スパイダース / ノー・ノー・ボーイ / 田辺昭知 / かまやつひろし / フィリップス
- 1966/3/ ジャッキー吉川とブルー・コメッツ / 青い瞳（英語盤） / 橋本淳 / 井上忠夫 / コロムビア
- 1966/4/ 加山雄三 / 蒼い星くず / 岩谷時子 / 弾厚作 / 森岡賢一郎 / 東芝
- 1966/6/ 加山雄三 / お嫁において / 岩谷時子 / 弾厚作 / 大橋節夫 / 東芝
- 1966/6/ マイク真木 / バラが咲いた / 浜口庫之助 / 浜口庫之助 / フィリップス
- 1966/7/ ジャッキー吉川とブルー・コメッツ / 青い瞳 / 橋本淳 / 井上忠夫 / コロムビア
- 1966/7/ ザ・サベージ / いつまでもいつまでも / 佐々木勉 / 佐々木勉 / フィリップス
- 1966/8/ 荒木一郎 / 空に星があるように / 荒木一郎 / 荒木一郎 / 海老原啓一
- 1966/9/ ザ・スパイダース / 夕陽が泣いている / 浜口庫之助 / 浜口庫之助 / フィリップス

1966/9/ ジャッキー吉川とブルー・コメッツ / 青い瞳 / 橋本淳 / 井上忠夫 / コロムビア

1966/10/ 荒木一郎 / 今夜は踊ろう / 荒木一郎 / 荒木一郎 / 寺岡真三 / ビクター

1966/10/ ブロード・サイド・フォー / 星に祈りを / 佐々木勉 / 佐々木勉 / フィリップス

1966/11/ ザ・ワイルド・ワンズ / 想い出の渚 / 鳥塚繁樹 / 加瀬邦彦 / 東芝

1966/12/ シャープ・ホークス / 遠い渚 / 橋本淳 / すぎやまこういち / キング

加山雄三の音楽がグループ・サウンドに与えた影響は大きい。大きなセールスは想像をはるかに超えるもので、レコード会社のディレクターは加山雄三のヒットと和製ポップスの流行の共通点を探っていた。また加瀬邦彦のように純粋にザ・ビートルズの音楽的影響を受けた音楽家にとっては自作自演（作詞は岩谷時子）でかつ自身による演奏で、アメリカン・ポップスやザ・ベンチャーズの技法やエッセンスをダイレクトに作品に反映させていること自体が画期的な試みだったのである。

加瀬邦彦は自身のグループ加瀬邦彦とザ・ワイルド・ワンズを結成。バンドの命名者は加山雄三である。デビュー曲「想い出の渚」は66年11月発売。レーベルは和製ポップス3大レーベルの一つである東芝キャピトル。担当ディレクターはザ・ベンチャーズの担当 A&R 安海勲だった。

ザ・サベージの「いつまでもいつまでも」は66年7月発売なので「想い出の渚」より4ヶ月早く「青い瞳（日本語盤）」とほぼ同時期である。マイク真木の「バラが咲いた」が6月で、荒木一郎の「空に星があるように」が8月発売。どちらもモダン・フォークを取り入れた作品である。

ザ・サベージは寺尾聰が在籍したことで知られるが、シャドウズの曲名をグループ名にした学生のエレキ・バンドで『勝ち抜きエレキ合戦』で優勝した実力派である。デビューに際してヴォーカルを取り入れてフォーク調の和製ポップスでデビューした。

モダン・フォークは米国の音楽をダイレクトに模倣した大学生のアマチュア・バンドを中心にしたサークルによる音楽活動が原点にある。モデルになったのはブラザース・フォア、ピーター・ポール＆マリー（PPM）、キングストン・トリオ、ジョーン・バエズといったアーティストである。日本では1963年に「スチューデント・フェスティバル」「フーテナニー」が開催された以降、「ジュニア・ジャンボリー」「ファミリー・ジャンボリー」「アップ・タウン・ジャンボリー」「ティーン・ポップ」といった学生による自主コンサートが多く開催されていた。65年には「日劇フォークソングフェスティバル」が開催される。ザ・フォーク・クルセダーズやジャックスはこのシーンで活動していたグループである。日本版ウッド・ストックともいふべき1969年に始まる「全日本フォーク・ジャンボリー」の名称はこれらに由来する。

彼らはVAN社製のボタン・ダウンのシャツにコットン・パンツ、髪型は最近リバイバルしつつあるアイビー・カットと呼ばれる短めできちんとした七分だけでバイタリスのヘア・リキッドを使用。靴はリーガルのローファーというアイビー・ルック（現在でいうところのアメリカン・トラッドに近い）が定番のファツ



ションで、これは音楽と同等に重要なアイテムだった。音楽的な編成は上記アーティストとほぼ同じで、マーチン社製のD-28を筆頭にしたフォーク・ギター、ウッド・ベースを中心に5弦バンジョーが加わる場合もあった。基本はアコースティック編成でドラム・パートはない。またオリジナル曲という発想は初期においては皆無に近い。

マイク真木の在籍したモダン・フォーク・カルテットやブロード・サイド・フォー、ロビー和田とニュー・フォークス、小室等が高校生の時に結成したPPM フォロワーズといったところが初期に活動していたグループである。このシーンそのままカレッジ・ポップス(キャンパス・ポップス)へと繋がり、多くの人脈はそのままニューミュージック・シーンへと進む。

1967年2月5日にザ・タイガースのデビュー・シングル「僕のマリー」が発売される。作詞は橋本淳で作曲はすぎやまこういちである。前年66年のジャッキー吉川とブルー・コメッツ「青い瞳」「青い渚」ザ・スパイダース「夕陽が泣いている」ザ・ワイルド・ワンズ「想い出の渚」のヒットによって下地ができていたグループ・サウンドが本格化した記念すべき作品である。

同月には黛ジュン「恋のハレルヤ」が発売された。3月にはジャッキー吉川とブルー・コメッツ「ブルー・シャトウ」、5月に美空ひばり「真赤な太陽」、6月にゴールデン・カップス「いとしのジザベル」が続いた。

筒美京平の初ヒット曲であるヴィレッジ・シンガーズ「バラ色の雲」の発売日はこれらに連なる1967年8月1日である。ヴィレッジ・シンガーズはもともとフォーク・グループで彼らの髪型が典型的なアイビー・カットである。前年66年10月に「暗い砂浜」でデビュー、翌67年2月にはセカンド・シングル「君を求めて」をリリース。「バラ色の雲」は第3弾シングルである。担当ディレクターは泉明良。デビュー2作はカントリー・シンガーの寺本圭一の主導によるものでフォーク・ロック調の楽曲だった。これは前述のザ・サベージとは逆のパターンでモダン・フォークのグループがドラムスやエレキ・ギターを導入して音楽形態を変更したものである。

このようにグループ・サウンドの成立の初期は大別して「エレキ・バンドのヴォーカル導入」と「フォーク・グループのロック化」という二つのパターンが混在していた。ザ・タイガースはどちらのパターンでもなく、ザ・ビートルズの影響をダイレクトに受けた若いアマチュア・バンドのプロ・デビューである。

65年の「フリフリ」「ユア・ベイビー」の2曲はリヴァプール・サウンドの日本化を純粋に目指した作品である。この2曲はどちらも彼ら自身がバンドとしてリメイクしていることから、楽曲制作のコンセプトや作品自体に自信や多くのこだわりがあったことが推察される。ザ・スパイダースの「フリフリ66」やザ・ワイルドワンズのデビュー・シングル「想い出の渚」のカップリング曲「ユア・ベイビー」を聴けば彼らの目指した地平がくっきりと見える。



66年2月のザ・スパイダースの実質的なデビュー・シングルとなるフィリップスの「ノー・ノー・ボーイ」も続く「ヘイ・ボーイ」「サマー・ガール」も同様である。また「フリフリ」と「ノー・ノー・ボーイ」の狭間の65年12月にリリースされたザ・スパイダースの「越天楽ゴー・ゴー」や66年3月のブルー・コメッツの「青い瞳(英語盤)」のカップリング「青い彗星」はどちらもインストゥルメンタルだが、演奏もアレンジもコード・ワークもサウンドもリズム・アンサンブルもすでに世界標準レベルである。

66年9月のザ・スパイダース「夕陽が泣いている」は趣きが異なる。同じフィリップス邦楽のマイク真木「バラが咲いた」の成功に続いてプロ作家である浜口庫之助の作詞作曲による楽曲が投入され、セールス的にも大きな成功を収めたのである。これはレコード・ビジネスという観点からは優れた判断だが、「リヴァプール・サウンドの日本化」とはかなり異なる音楽である。

ジャッキー吉川とブルー・コメッツ「ブルー・シャトウ」は67年のレコード大賞を獲得する大ヒットである。前作「何処へ」は66年12月発売。石坂洋次郎原作の日本テレビ系列の連続テレビ・ドラマの主題歌でセールス期待値の高い作品だった。作詞作曲は万理村ゆき子でメンバーのオリジナル曲ではない。カップリングの「センチメンタル・シティ」は作詞・橋本淳/作曲・すぎやまこういちでこちらもプロ作家の作品である。

「ブルー・シャトウ」は作詞が橋本淳で作曲は井上忠夫。編曲は森岡賢一郎である。印象的なイントロの4小節も含めて森岡賢一郎の優れたアレンジが全編に冴えわたる傑作である。当時は小学生が替え歌にして口ずさむほどの大ヒット曲だった。当然だが、ここには「リヴァプール・サウンドの日本化」は見当たらない。

ザ・タイガースの「僕のマリー」がプロ作家の作詞・橋本淳/作曲・すぎやまこういちの作品であることやザ・ビートルズの音楽との類似性が低いことに違和感を持つ聴き手は少数である。「シーサイド・バウンド」も「君だけに愛を」も同様である。

「夕陽が泣いている」「僕のマリー」「ブルー・シャトウ」の3曲に共通しているのはストリングスの導入である。「ブルー・シャトウ」の編曲にはアレンジ革命の主役の一人である森岡賢一郎が起用された。イントロのフレーズが象徴するように全体の楽曲制作の骨格に組み込まれたキャッチーかつ優れたオーケストレーションで、この時点においてかなり斬新なものだが、「夕陽が

泣いている」と「僕のマリー」のストリングスは旧来の「歌と伴奏」の域を出ないアレンジ・ワークである。

「バンド」という音楽表現形態とレコーディング＝レコード発売における在り方については様々な意見がある。バンド固有のメンバー構成とレコーディング時の楽器編成の相違や追加をどのように捉えるかである。一般的なロック・コンボの編成はドラムス、エレキ・ベース、エレキ・ギターで、鍵盤楽器やパーカッション類の有無は成り立ちによって異なる。当然、表現できる音楽には限界がある。

ブラス・セクションやストリングスは1960年代以降の広義のポップスにはかなりの頻度で登場する。一方でエルヴィス・プレスリーやザ・ビートルズの初期の音楽にはあまり使用されていない。これらは目指す音楽の方向性の相異であって優劣ではない。またバンドのメンバー以外の演奏者の有無についても様々な意見がある。歌謡曲においてその楽曲の完成型に向かって最良の形式や方法を選択することは当然の行為である。「僕のマリー」のレコーディングの演奏にザ・タイガースのメンバーが参加していないことは周知である。

上記のような背景にある67年2月の「僕のマリー」と67年3月の「ブルー・シャトウ」の大きなヒットによってグループ・サウンズは一般化されて広く認知されることになる。先駆けとなったのは66年9月の「夕陽が泣いている」である。はじめは「リヴァプール・サウンドの日本化」と「和製ポップス」のバンド投入だったが、レコード会社にとって重要なのは聴き手がどのようにその音楽を楽しむか、という点である。この時点からグループ・サウンズは広大な歌謡曲の一分野として、次々とヒットを放っていくことになる。歌謡曲は常にそのようなプロセスで発展してきたのである。

ヴィレッジ・シンガーズはデビュー2作がセールス的に振るわず、挽回策も含めてメンバーが一一新される。オリジナル・メンバーの小松久と林ゆたかが残って新たにヴォーカルの清水道夫と小池哲夫、笹井一臣が加わり、実質的には5人編成のグループ・サウンズとして再出発を果たすことになる。その第1作目が「バラ色の雲」である。

ディレクターの泉明良は新生ヴィレッジ・シンガーズで第2のブルー・コメッツを目指した。「バラ色の雲」がヴィレッジ版「ブルー・シャトウ」であることはいままでもなく、編曲に森岡賢一郎を起用したことからヒットに向けた意気込みがわかる。

ブルー・コメッツの音楽の大きな特徴は高度な演奏技術とハーモニー・ワークの独自性にある。「ブルー・シャトウ」で展開されるユニゾンと三声のハモリの絶妙なコンビネーションは当時の洋楽シーンも含めてほぼみかけないブルー・コメッツのオリジナルである。特にラスト・サビの「♪ブルーブルーブルーブルー〜シャト〜」の三声から四音へ向かう音の積み方と迫りに満ちた歌唱は容易に実現できるレベルではない。



「バラ色の雲」のラストの「♪海辺の まちへ〜」の「♪へ〜」の若さ溢れる三声はまさにヴィレッジ版「ブルー・シャトウ」である。同時期のゴールデン・カップスのデビュー曲「いとしのジザベル」のやや粗削りな追いかけてラストとサビの「♪ジザベエエ〜」も同様の試みである。



「ばら色の人生」(La Vie en rose ラ・ヴィ・アン・ローズ)はエディット・ピアフの歌ったシャンソンの代表作で古典ともいべき有名曲である。作詞はエディット・ピアフ自身による。典型的なメタファー＝象徴論である。日本における象徴派詩人の第一人者西條八十は歌謡曲の大作詞家として歌謡詩にも大きな影響を与えた。

筒美京平は「バラ色の雲」のヒットと「渚のうわさ」で独自のスタイルを確立したことにより、作曲家としての活動を続けていく見通しが立った、と『HITSTORY』のインタビュー時に述懐しているが、同掲載のインタビューで橋本淳は「バラ色の雲」について「抽象的な言葉を投げかけて大衆の想像力を喚起する」と答えた。これは真意はともかく自身の象徴派宣言ともいえる発言ではある。

エディット・ピアフの「ばら色の人生」は、元がフランス語であっても、それが何を表現しているか、熟考しなくても感覚的にわかる喩えである。それにしても「バラ色の雲」とは……。橋本淳は父が児童文学者の与田準一であることは広く知られる。正確には与田準一はフランス文学の翻訳家であり、詩人であり、同時に多くの童謡を残した優れた作詞家である。

初期の橋本淳の作詞には散文詩が多い。これは同世代の安井かずみにも顕著でフランス文学の遠い影響もあるだろうが、個の独自性の方がより強い。エディット・ピアフのもう一つの代表作「愛の讃歌」のは岩谷時子の訳詞による越路吹雪の歌唱が知られる。「吹雪＝ふぶき」という芸名自体が漢字の組み合わせと読みも含めて寓意的なもので象徴論の一種かと思うが、シャンソンの歌謡曲化に最も貢献した岩谷時子はアダモの「ろくでなし」や「雪が降る」も訳詞しているが、加山雄三や郷ひろみにおけるオリジナルの作詞においては散文詩はほぼみられない。「いいじゃないの幸せならば」が四行詩であるのと「恋の季節」が散文詩的ではある。

「バラ色の雲」は典型的な散文詩で四行詩である。詩人としては中原中也の影響もあるかと思うが、容易に発想できるワードではない。橋本淳の作詞の



大きな特徴は「フィクションをフィクションと思わせない」ことであり、突飛な発想も自然に感じさせる。この絶妙な温度感とそれを醸し出すセンスが持ち味であり魅力でもある。次々作「虹の中のレモン」の「♪ はじめての 口づけそれは虹の中のレモン」はさらに不思議な歌詞だが「バラ色の雲」同様にごく自然である。それを疑問に思う聴き手もいない。つまり「よく考えてみると、何かがおかしいはずだが、何故かそれを感じさせない」。これこそが歌謡詩の醍醐味であり人々を惹きつける磁力なのだ。詩は論理ではないのである。

「バラ色の雲」は期待を上回るヒットとなる。森岡賢一郎の印象的なイントロはもちろん、音楽的にはカノンによるオクターブ・ユニゾンによる掛け合いのコーラスが耳に残るが、「ブルー・シャトウ」の変型ともいべきアイデアと思われる。掛け合いのコーラスは67～68年にかけて多用されるグループ・サウンズという音楽の大きな特徴である。キーはEm。レンジは下がシで上がレで1オクターブ+2音。サビの「♪ 君はやさしく 涙をふいていた」のハーモニック・マイナー・スケールによる半音の続くメロディー展開が聴かせどころである。

続く「好きだから」からは筒美京平がアレンジも担当。チェンバロとストリングスが導入されている。「バラ色の雲」ではメンバー自身の演奏でレコーディングに臨んだが、「好きだから」以降はスタジオ・ミュージシャンも多くのパートで参加している。

当時のレコーディングは録音機器やシステム、環境等の関係もあり、バンドとストリングスやプラス・セクションも同時録音が通常である。「バラ色の雲」ではストリングスとバンド・パートを同時に録音したが、バンド演奏のOKテイクが録れるまで、ストリングス・セクションの10人以上のスタジオ・ミュージシャンも同時に演奏を繰り返すことになる。「バラ色の雲」のアレンジではバンド・パートの演奏難易度は比較的低いものだが、レコーディングにおける演奏技術に要求される質はかなり高度なもので、なかなか到達できるレベルではない。

「好きだから」では上記も踏まえつつ筒美京平アレンジが存分に展開される。エレキ・ギターの低音2弦弾きのソロにはじまり、チェンバロが絡みながら、ストリングスがリズム・パート的なフレーズで加わるあたりは筒美京平ならではのオーケストレーションである。シンバルとハイ・ハットのコンビネーションも地味ながら最高の隠し味である。

グループ最大のヒットとなった「亜麻色の髪の乙女」（詞・橋本淳/曲・すぎやまこういち）を挟んでの続く「虹の中のレモン/思い出の指輪」は両A

面シングル。筒美京平作品で両A面2曲ともチャート・インした稀有なケースで「虹の中のレモン」が17位で「思い出の指輪」が12位。

松竹映画『思い出の指輪』（1968年4月27日公開）と『虹の中のレモン』（1968年7月20日公開）の主題歌で2作ともメンバー自身が出演している。併映はそれぞれ『夜明けの二人（主演＝橋幸夫・黛ジュン/監督＝野村芳太郎）』と『天使の誘惑（主演＝黛ジュン/監督＝田中康義）』。『思い出の指輪』は学園青春もので主演もヴィレッジ・シンガーズ。ザ・タイガース『世界はボくらを待っている』（東宝）の2週間後に公開されるゴールデン・ウィーク映画で期待値は高かった。「バラ色の雲」の歌唱・演奏シーンでは銀座ACBのステージ上の姿がみられる。プレス・シートでは触れられていないが、徳永芽里の歌唱シーンもレアである。『虹の中のレモン』は松竹ならではの家族の相克を描くウェットな物語で「母もの」の要素もある。2作ともヴィレッジ・シンガーズが人気グループの「ヴィレッジ・シンガーズ」としてヘッド・ライナーで出演している。

共演は2作ともチャーミングな演技と容姿で若手女優として人気の高い松竹の尾崎奈々。監督は70年代に『旅の重さ』『津軽じょんがら節』『無宿』という漂泊の三部作を創出、独特の映像作家として高く評価される叙情派の斎藤耕一。

シングル盤のジャケットにはホリ・プロダクション製作 松竹映画配給『思い出の指輪』A面「虹の中のレモン」が挿入歌、「思い出の指輪」が主題歌とクレジットされている。映画の公開はシングルとは順序が逆で『思い出の指輪』が先行している。

「虹の中のレモン」は「♪ ランララ ランララ」というソフトなコーラスではじまるフォーク寄りの曲調でハーモニカ、ストリングスをフィーチャー。前作「亜麻色の髪の乙女」のヒットから導かれたサウンドと思われる。清水道夫の声質やヴォーカル・スタイルからもこのあたりが、ヴィレッジ・シンガーズの本質的な魅力ともいえる。「♪ 涙よ今日は 悲しみよさようなら」は文学界のマドモワゼル・シャネルといわ





れたフランソワーズ・サガンの『悲しみよこんにちは』がヒントと思われるが、前述と同様に「何かがおかしいはずだが、何故かそれを感じさせない」歌詞の典型である。「思い出の指輪」は筒美京平ポップス全開のアレンジで、BPM130の高速ストリングスにグラント・ハーブが絡みグロッケン、フルート

が全編に導入されている。オルガンはおそらく Hammond だろう。ラストの「♪めぐり逢う日まで～」の四声の E♭M7→A♭M7→Gm69th→Am6 のハーモニーは「ブルー・シャトウ」の再トライ。さすがに難易度は高い。

「星が降るまで」はヴィレッジ・シンガーズにとってコロムビアでのラスト・シングルでこの後は CBS ソニーに移籍。筒美京平にとってもヴィレッジ・シンガーズに提供したラスト・シングルとなる。美しいメロディーのドリーミー・ポップスで、同じコロムビアの J・シャングリラが 69 年 10 月の「渚に夢ひとつ」のカップリング曲としてカバー。土居まさるも 71 年にシングルとしてカバーしている。

ザ・ジャガーズの「マドモアゼル・ブルース」は 1968 年 1 月 25 日リリース。筒美京平にとっては、ヴィレッジ・シンガーズの「バラ色の雲」「好きだから」の 2 作とアウト・キャスト「愛なき夜明け」に続くグループ・サウンズに提供した 4 作目でフィリップスでのシングル第 1 作目となる。続く江美早苗「涙でかざりたい」は翌 2 月の発売なのでほぼ同時期である。

筒美京平作品の中で「ブルース」と名付けられた作品は全部で 18 曲。「マドモアゼル・ブルース」が最初の作品である。作詞と作曲の関係は興味深い。「ブルース」というのは音楽の形式の一つのカテゴリーの名称である。作詞家が「ブルース」という言葉を使用しても音楽が構造的に「ブルース」でなければ成立しないし、作曲家がブルースの形式を用いても作詞家がブルースという語句をタイトルや歌詞に使用するとは限らない。

「ブルース」は 1 楽節が 12 小節でコード進行はブルース・コードで音階は



ブルーノート・ペントニックかメジャー・ペントニック・スケールということになる。日本では 1937 年の戦前の作品である淡谷のり子「別れのブルース」(詞・藤浦洸/曲・服部良一)の大ヒットで一般化されたが、これは音階もコードもブルースというよりは「シャンソン」に近い。「ちょっと物悲しい」が「ブルース」という感じだろうか。戦後になると昭和 30 年代以降は歌謡曲における「ブルース」は 1 楽節が 8 小節という「歌謡ブルース」が音楽構造が異なっても雰囲気として定着する。

「マドモアゼル・ブルース」は生真面目な筒美京平の制作姿勢もあって A12 小節 B12 小節という形式でコードもブルース進行で音階はブルーノート・ペントニックが使われている。つまり音楽的には完璧なブルースである。筒美京平がなんとなく純粋なブルース形式を提案するとは考えづらいので、おそらく「♪マドモアゼル・ブルース」というワードは先にあったのだろう。出だしの「♪Baby be my free」の 4 小節はメロディーが先行したと思われるので、詞→曲→詞というやりとりで完成したと考えるのが自然である。「♪Baby be my free」は「かつこいい>なんとなくわかる」という橋本淳のナイスな英語詞である。

イントロから出だしのエレキ・ギターの印象的なカッティングはザ・ビートルズ「今日の誓い Things We Said Today」からのアイデアであることは一聴してわかる。日本盤シングルとしては「ビートルズがやって来るヤァ!ヤァ!ヤァ!」(1964 年 8 月 5 日)の B 面に収録されている。映画『ビートルズがやって来るヤァ!ヤァ! A Hard Day's Night』はザ・ビートルズ映画の第 1 作で 1964 年 8 月 1 日に日本公開されて大ヒット。米国のザ・モンキーズ『ザ・モンキーズ・ショー』をはじめ、その後日本において GS 映画が多く製作される礎となった重要な作品である。

キーは Am。構成は A→B→A' の 2 コーラス。ヴァース・コーラス形式で考えれば冒頭の 4 小節はブリッジで間奏は A パートの歌抜きとなる。出だしの掴みは「今日の誓い」だが、アレンジは筒美京平オリジナルが多くみられる。中でもストリングスの配置が際だっている。B パートではオブリガードで歌と掛け合うフレーズだが、間奏ではオブリガードはそのまま続行してチェロがメロディー・パートを担当してストリングス・パートが掛け合いになる。2 拍ア



タマのウッド・ブロックのアクセントも印象的だ。

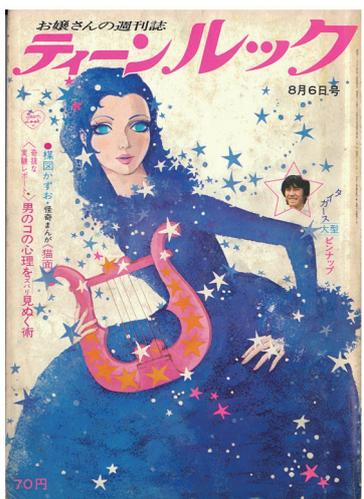
ザ・ジャガーズも松竹映画『進め! ジャガーズ 敵前上陸』(1968年3月30日公開)に出演。「マドモアゼル・ブルース」とカップリング曲「哀れなジョン」の歌唱・演奏シーンもある。監督は松竹喜劇のエースともいべき前田陽一。シナリオは小林信彦の別名義である中原弓彦と前田陽一の共同名義。二人は後に原作・監督として『新・唐獅子株式会社』(1999年)

で邂逅することになる。かなりシュールな物語展開なので、ザ・ジャガーズのファンのティーン・エイジャーがどの程度楽しめたかはともかく、ザ・ビートルズの第2作映画『ヘルプ』にも通じるよくてきたスラップスティック映画である。岡本信が主演ともいう役どころで共演は松竹の中村晃子と尾崎奈々。中村晃子がジャガーズをバックに「虹色の湖」を歌唱するシーンもある。尾崎奈々は相変わらず可憐で中村晃子は常にかっこいい。

ブルー・コメッツの「ブルー・シャトウ」の大ヒット&レコード大賞受賞とザ・タイガースの圧倒的な人気を推進力に新生ヴィレッジ・シンガーズもヒットを連発、ザ・ジャガーズ「君に会いたい」とザ・カーナビーツ「好きさ好きさ好きさ」が67年6月の同月発売。67年10月にはザ・テンプターズがデビュー。ザ・ダイナマイツ「トンネル天国」、ザ・モップス「朝まで待てない」が翌11月。ザ・スパイダース、ザ・ワイルドワンズも引き続き堅調でグループ・サウンズが大きなブームになったのが1967年の歌謡曲シーンだった。

ザ・タイガースの沢田研二が1948年生。人気を二分したザ・テンプターズの萩原健一が1950年生。二人はレコード・デビューした時に17~18才という若さだった。聴き手=ファンは女性が圧倒的多数で彼女たちは二人の同世代またはやや年下のミドル・ティーンで1950年代(昭和25~34年)生まれの団塊の次の世代が中心だった。ザ・ビートルズの人気も同様で当時の映像をみるまでもなく、熱狂的なファンは戦後生まれの女性ティーン・エイジャーが圧倒的多数で男性はごく少数であり、大半の男性の反応は冷ややかだった。あとから評価するのは容易なのである。

ファンを獲得するための媒体はテレビの歌番組と台頭しつつあった深夜放送を中心とするAMラジオといった放送と芸能雑誌である。『平凡』『明星』



という二大月刊誌を筆頭に、『近代映画』は「グループ・サウンド」というカテゴリ名を発祥のひとつでGSを好んで取り上げていた。68年には『ティーン・ラック』(主婦と生活社)『セブンティーン』(集英社)といった十代向けにターゲットを絞ったファッション&芸能雑誌も創刊された。

マーケットのセグメント化の始まりである。それらの雑誌の特集は「特別企画人気GS総選挙」「ティーンのヘアスタイル専科」「初恋の味ってどんなの?」や「男の心の心理をズバリ見ぬく術」「ティーンの肌を美しくするおやつ特集」といったもので、読者の投稿ページには小説や詩やイラストが多く掲載され、悩み相談には異性に関する未知についての質問が多くあった。そして何よりこれらの雑誌の読者の世代の女子の大半は「処女」だった。

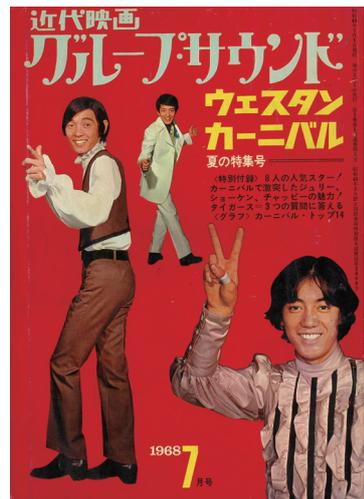
GSの歌詞が「花鳥風月」ならぬ「花・星・湖・夢」や「少女趣味」と表されるのはこのような背景がある。GSの聴き手の核であるこの時代の十代の女子はリアルに「夢見がちな少女」だったのである。

オックスの「ガール・フレンド」は1968年5月5日発売。この年1968年1月4日に創刊された本格的なチャート誌であるオリジナル・コンフィデンスにおいて6位を獲得。筒美京平にとって初のベスト10ヒットとして記念すべき作品である。

GSの代表作のうち橋本淳が作詞を提供したのはブルー・コメッツ、ザ・タイガース、ヴィレッジ・シンガーズ、オックスの多くのヒット曲で、他にシャープ・ホークス「遠い渚」ゴールデン・カップス「長い髪の少女」ザ・ジャガーズ「マドモアゼル・ブルース」といったところである。

「♪ 僕のかわいい友達に 白いテラスに囲まれた 夢のお城に住んでいる」という出だしの歌詞はまさにGSファンのティーン・エイジャーの女の子に歌いかけたもので、それは「♪ 旅路の果ての 孤独な街で 俺は悲しき恋を知ったのさ」(青い瞳)や「♪ Oh Please Oh Please 僕の心を君にあげたい」(君だけに愛を)や「♪ バラ色の雲と 思い出をだいて 僕は行きたい君の故郷へ」(バラ色の雲)や「♪ たとえどんなに 僕がつかなくてもシルクのドレスを着せてあげたい」(マドモアゼル・ブルース)とはまったく異質の表現である。これは橋本淳の描くビート感に満ちたお伽噺であって恋愛の歌ではない。

「ガール・フレンド」のサウンド・プロダクションはフルートのソロとストリングスのバックングからドラムスのフィル・インで始まる。ドラムスのシェイクとエレキ・ベースのR&B風のシャッフル・ビートがリズム・セクションの骨格を形成してエレキ・ギターがカッティングという楽器編成。オルガンは入っていない。これはバンド編成とレコーディングは完全に別物という解釈で68年にはその整合性についての議論や疑問はすでに存在しない。





「ガール・フレンド」は筒美京平にとってはデビュー作で各社競作となった泉健二「黄色いレモン」を除けばビクターの初作品となる。ディレクターは前年に佐良直美「世界は二人のために」を大ヒットに導いたビクターの小澤栄三。売れるわけないと社内で酷評された「世界は二人のために」を自身の足で全国行脚して売り込んだエピソードは有名で、ヒットに対する嗅覚と執着には定評がある。泉明良や草野浩二とは違うタイプのビクターのプロデューサー志向のディレクターとの初顔合わせである。

オックスは「プロ志向のグループ・サウンズ」として結成された。ザ・ビートルズが好きなアマチュア・バンドだったザ・タイガースやスパイダースやブルー・コメッツのようにロカビリー～エレキの流れから登場した老舗バンドでもない。ザ・ワイルド・ワンズの目指した「リヴァプール・サウンドの日本化」とも無縁である。ゴールデン・カップスやザ・テンパターズのような横浜・大宮という首都圏ローカル・レベゼンの比較的マニアックなバンドとも違う。最初から「グループ・サウンズ」というすでに流行しているムーヴメントでのデビューを目指して結成されたのである。在り方としては宮ユキオ率いるザ・ジャガーズに近い。

イントロ 8→A12→B12→A'12 小節というブルース構成で音階はマイナー・ブルース・スケール。すなわち基本的な音楽構造は R&B である。タンバリンやライド・シンバルの斬新なプレイはその影響と思われる。一方でアレンジやオーケストレーションはフルートとストリングスの洗練されたフレーズで彩られていて聴き心地はかなりソフトなものである。これは筒美京平オリジナルの新たなサウンド・プロダクションであり、オックスの音楽の新しさはここに集約されている。

キーは Am でレンジは下がシで上がドなのでほぼ 1 オクターブと広くはないが、野口ヒデトの音域としては下がやや低いようだ。BPM は 120。A メロの「♪ マイ・ガール マイ・ガール」の追いかけコーラスが印象的だが、サビの「♪ 僕らの キスを」の三声のハーモニーが聴かせどころである。「♪ 水色の朝日は～」の表現が目目されるが、ディレクターの小澤栄三がその表現に OK しなかったため、橋本淳が夜明けの海辺まで車で連れて行き、その意図を説明した、という逸話がよく知られている。

1968 年の若者向けの洋楽シーンはザ・ビートルズ「ヘイ・ジュード」やザ・ローリング・ストーンズ「ジャンピン・ジャック・フラッシュ」と並んでオーティス・レディング「ドック・オブ・ベイ」がヒットした。ここからメンフィス・ソウルの代名詞ともいべき Stax(スタックス)レーベルやその周辺の音楽に注目が集まり、サム&ダイブの「ホールド・オン (Hold On, I'm Comin')」、「ソウル・マン」やウイルソン・ピケット「ダンス天国」といった楽曲が改めて紹介されて広く知られるようになる。まだサザン・ソウルという言葉は一般的ではないが日本においてモータウンとは異なる R&B という音楽が認知された初期の状況である。

GS における R&B には大別すると多少の交差はあるが、ゼムやスペンサー・デイヴィス・グループ、アニマルズといった英国経由でのブルース志向とディスコやゴージャズ喫茶のハコバンや米軍キャンプ等を背景に持つ米国の黒人志向の二つの流れがある。ゴールデン・カップスやモップス、ダイナマイツはブリティッシュ・ブルースの流れで、ズー・ニー・ヴー、デ・スーナーズ、ザ・ボルティジがスタックスを筆頭とする黒人 R&B の影響下にある。

「♪ おしゃれなぼくサイケな恋 君が好きさ 踊りに行こう」ではじまる「ダンシング・セブンティーン」はオックスの第 2 弾シングルで 1968 年 9 月 5 日にリリースされた。チャートの最高位は 28 位。前年にザ・タイガースが夏向けの第 2 弾シングル「シーサイド・バウンド」(67 年 5 月)で一気にブレイクしたのと同様に、ノリのよいリズムとビートの「ダンス・ミュージック」としてのアプローチである。つまり若いリスナーに向けたアップ・テンポで盛り上がる新しいサウンドがコンセプトにある。この場合、歌詞に物語や心理描写は不要である。楽しくサイケにみんなで騒ごうよ、という雰囲気＝パーティー感が重要なのである。

「♪ 踊りに行こうよ 青い海のもとへ」ではじまるザ・タイガースの「シーサイド・バウンド」の「バウンド」はすぎやまこういちの発案による日本独自のニュー・リズムでリズム歌謡の流れにあったが、筒美京平は流行の兆しを見せつつあったスタックスの R&B にヒントを見出した。

サム&ダイブの「ホールド・オン」(日本盤ではカップリングが「ソウル・マン」)はゴールデン・カップス、ズー・ニー・ヴー、デ・スーナーズ、といったグループや和田アキ子がカバーしたことから日本でも知られた楽曲である。特にメンフィス・ホーンズ(別名 Mar-Keys Horns)によるブラス・セクションの迫力のあるプレイはイントロだけ

でなくリフとして機能する斬新なフレーズで、当時の認識ではこれぞ R&B というわかりやすく派手なサウンドである。トランペット 4、トロンボーン 2、テナー・サクソ 2~3、バリトン・サクソ 2~3 という 10 人前後の大編成で、音圧のある分厚いサウンドはここから生まれる。ジャズのビッグ・バンドがヒントとなっていると思われるが、バリトン・サクソが重低音を創出しているの



が特徴である。

構成はイントロ 8→A8→A'8→B8→ブリッジ(間奏)8小節の2コーラスというシンプルなもの、間奏の後半はイントロと同じだが、前半の4小節にホーン・セクションをメインにした新たなフレーズが登場する。

楽器編成はドラムス、エレキ・ベース、エレキ・ギター、コンボ・オルガンの4リズムにホーン・セクションとタンバリン。ハネの効いたシャッフル・ビートのドラムスとエレキ・ベースを基軸に全体のグルーヴを醸成するのはホーン・セクションとタンバリンである。特にタンバリンのパーカッシヴな固い金属音はAパートではハネたシャッフル、Bは16符のノリでビートを牽引してアクセントになっている。勢いのあるドラム・フィルやエッジの効いたエレキ・ベースのシャッフル風のリフもスタックスの雰囲気を感じさせる。2番のAパートではエレキ・ベースのフレーズをバリトン・サクスが同じフレーズで低音部を補強している。

「ホールド・オン」も「ソウル・マン」もアイザック・ヘイズ関連の楽曲で演奏はブッカー・T&MG'sとメンフィス・ホーンズというスタックスの定番かつ最高の布陣である。「ソウル・マン」はスティーヴ・クロッパーのギター・リフが全体を牽引。途中からホーン・セクションがギター・リフに替わって同じフレーズで参加すると、ギターがリフをくずしてアドリブ気味にプレイ。「ダンシング・セブンティーン」のギターのフレーズはその雰囲気だろう。

キーはCでスケールはメジャー。レンジは下がドで上がファで1オクターブ半。ヴォーカルの野口ヒデト(現在の真木ひとと)のレンジとしてはこちらがジャストと思われる。トップはサビの「♪ 踊り明かそう」「♪ 恋をしようよ」のファの部分。BPMは124でそれほど速くはないが「♪ ダンシング・セブンティーン oh! oh! oh!」は1小節に8音を詰め込んだ16ビートで畳みかけるメロディーの効果もあり、かなり高速に聴こえる。

注目すべきはコード・ワークである。Aパートは基本的にC7とF7の2コードで押していくブルース・コード。ブリッジ前半もC7→F7のみ。あえて洗練されたMaj7(メジャー・セブンス)を使わずに通常のセブンスを用いている。つまりこれは8小節のブルースである。このシンプルなコード・ワークは筒美京平作品の中ではかなり珍しい。B=サビもCだけで、スケールは基本はメジャー・ペンタトニックだが、サビの最高音の「♪ 恋をしようよ」の最高音の上のファがこの曲の決め手ともいべき箇所。「♪ ファファファファ」という同音だが、ここにDm7→D♭7という響きが出るところが筒美京平独自のセンスである。

同じく68年のR&Bブームの影響下にあるザ・ジャガーズ「星空の二人」は「ダンシング・セブンティーン」の2週前の68年8月25日発売。ジャガーズ6枚目のシングルとなる。前作「キサナドーの伝説」からリーダーの宮ユキオが脱退している。

イントロの派手なホーン・セクションが和製R&B感全開で「ダンシング・セブンティーン」と発売日も近いが、こちらはダンス・ミュージックというよりはBPM=100と落ち着いたテンポで歌詞も含めて歌ものの要素が強い。基本的な音楽構造はブルースだがジャズの要素も強く、構成もコード進行もかなり凝った作りになっている。

構成はイントロ4→A8→B8→C8小節と捉えるのが歌謡曲では一般的であると考えられるが、ブルース構成であればイントロ4→A12→B12小節となる。「♪ 星がきれいだね」のA(バース)ではじまり「♪ 今夜は二人でイエイエ」がBメロであれば「♪ はじめて恋を抱きしめた」がC=サビ(コーラス)なの



でCメロが登場することになる。一方でBメロ後半4小節の「♪ 誰も見えない月夜の渚」はAメロと同じ旋律なので、Bメロ後半がAメロ出だしと同じということになる。これだとやや不自然ではあるので、ブルース形式のA12→B12小節の変型と考える余地もある。全体に半音が多く歌唱難易度は高いが岡本信はナチュラルに難なく歌いこなしている。「♪ 今夜は二人でイエイエ」のあたりは半音の連打でA♭M7→A♭m→A♭dim→B♭M7というコード・ワークも聴き応え充分である。

「♪ ヘイヘイヘイ!」という掛け合いのコーラスが印象的だが、「マドモアゼル・ブルース」のカップリング曲「哀れなジョン」で使われたのが最初で、続いて68年7月の弘田三枝子の筒美京平5部作の4作目「渚の天使」のカップリング曲「恋のエンジェル・ベイビー」(作詞・林春生)でシンガーズ・スリーが同じフレーズのコーラスを展開。「星空の二人」ではメンバーが二声でハモ・パートを担当している。曲全体のイメージとしてはサム&テイブの「ソウル・シスター・ブラウ・シュガー Soul Sister, Brown Sugar」があると思われるが、「♪ ヘイヘイヘイ!」のコーラスはオーティス・レディングの「リスペクト」からのアイディアだろう。

オックスの第3弾シングル「スワンの涙」は1968年12月10日の発売。イントロ8→A12→B12小節の「ガール・フレンド」と同じブルース形式で音階はハーモニック・マイナー・スケール。奥村チヨ「北国の青い空」ブルー・コメッツ「北国の二人」、後の岡崎友紀「私は忘れない」に連なる橋本淳の「北国」もののひとつである。キーはBmでレンジは下がシで上がミの約1オクターブ半。下が「ガール・フレンド」と同じで「♪ 悲しい姿」のアタマの「か」の箇所。音域としてやや低い、これは意図的なものだろう。ハーモニック・マイナーの決め手となっているのは「♪ 遠い北国の 湖に」の最後の「♪ に」の箇所半音になるラ#。「♪ スワンの涙」の「♪ な」のラ#の箇所も同じ効果である。キーをBmにしているところもポイントで同じマイナー・キーでも「ガール・フレンド」のAmに比べてやや暗い響きである。

楽器編成は変則的で、ドラムスとエレキ・ベースとタンバリンだけでリズムの骨格を形成。エレキ・ギターはイントロで主旋律を担当する以外、本編はオブリガードだけで、鍵盤は「♪ あの空は あの雲は 知っているんだね」



「シャラララ」の三人が同じハーモニーで厚みを増している。

GSブームが衰退しつつある翌69年に入ってから「僕は燃えている」「ロザリオは永遠に」とシングルをリリース。オックスはデビューから5作連続で橋本淳・筒美京平コンビが楽曲を提供した重要アーティストとして永遠に記憶される。

オックス解散後の野口ヒデトのソロ・デビュー曲「仮面」、福井利男、岩田裕二、岡田史朗の3人による6人組の男性グループ、ピープルの唯一のシングル「恋人たち」も橋本淳・筒美京平が提供している。

のセリフの登場する間奏の6小節にピアノが用いられているのみである。最もフィーチャーされているのは大編成のストリングスで全体を牽引。特にコーダの美しい旋律には耳を奪われる。全体のテーマは哀愁ということだろう。

「♪ シャラララ」というAメロの三声の追いかけてコーラスが音の積み方も含めて全体の哀愁感を醸成している。「♪ こぼれるような 鐘の音」のハモは「♪

橋本淳GS主要曲

作詞	年	月	日	アーティスト	タイトル	作曲	品番	面	メーカー	CHART	
	1966	7		ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	青い瞳	井上忠夫	LL-10001-JC	A	日本コロムビア		
		9		ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	青い渚	井上忠夫	LL-10005-JC	A	日本コロムビア		
		12	1	シャープ・ホークス	遠い渚	すぎやまこういち	BS-549	A	キング		
		12		ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	センチメンタル・シティ	すぎやまこういち	LL-10015-JC	B	日本コロムビア		
		2	5	ザ・タイガース	僕のマリー	すぎやまこういち	SDP-2001	A	ポリドール		
		3	10	ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	ブルー・シャトウ	井上忠夫	LL-10022-JC	A	日本コロムビア	14	
		5		ザ・タイガース	シーサイド・パウンド	すぎやまこういち	SDP-2004	A	ポリドール		
		8	1	シャープ・ホークス	海へかえろう	すぎやまこういち	HIT-714	A	セブンシーズ		
		8	1	ヴィレッジ・シンガーズ	バラ色の雲	筒美京平	LL-10032-JC	A	日本コロムビア	69	
		8	20	ザ・タイガース	モナリザの微笑	すぎやまこういち	SDP-2011	A	ポリドール	18	
	1967	9	15	ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	北国の二人	井上忠夫	LL-10039-JC	A	日本コロムビア	7	
		11	10	レオ・ビーツ	霧の中のマリアンヌ	すぎやまこういち	HIT-719	A	キング・セブンシーズ		
		11	10	ヴィレッジ・シンガーズ	好きだから	筒美京平	LL-10042-JC	A	日本コロムビア	14	
		11	10	ダイナマイト	トンネル天国	鈴木邦彦	VP-2	A	ビクター		
		11	15	ゴールデン・カップス	銀色のグラス	鈴木邦彦	CP-1011	A	キャピトル	100	
		12	25	ザ・タイガース	君だけに愛を	すぎやまこういち	SDP-2016	A	ポリドール	2	
		1		アウト・キャスト	愛なき夜明け	筒美京平	SN-608	A	テイチク	97	
		1	25	ザ・ジャガーズ	マドモアゼル・ブルース	筒美京平	FS-1032	A	フィリップス	26	
		1	25	ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	こころの虹	井上忠夫	LL-10046-JC	A	日本コロムビア	5	
		2	5	ザ・カーナ・ビーツ	泣かずにいてね	すぎやまこういち	FS-1037	A	フィリップス	41	
	橋本淳	2	25	ヴィレッジ・シンガーズ	亜麻色の髪の乙女	すぎやまこういち	LL-10048-JC	A	日本コロムビア	7	
		3	10	レオ・ビーツ	貴族の恋	すぎやまこういち	HIT-728	A	キング・セブンシーズ		
		3	25	ザ・タイガース	銀河のロマンス	すぎやまこういち	SDP-2022	A	ポリドール		
		4	1	ゴールデン・カップス	長い髪の少女	鈴木邦彦	CP-1024	A	東芝キャピトル	14	
		4		ダイナマイト	ユメがほしい	すぎやまこういち	VP-6	A	ビクター		
		1968	4	21	ヴィレッジ・シンガーズ	虹の中のレモン	筒美京平	LL-10056-J	A	日本コロムビア	12
			5	5	オックス	ガール・フレンド	筒美京平	VP-8	A	ビクター	6
			6	25	スパイダース	真珠の涙	かまやつひろし	FS-1050	A	フィリップス	19
			7	1	ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	草原の輝き	井上忠夫	LL-10060-JC	A	日本コロムビア	15
			8	10	ヴィレッジ・シンガーズ	星が降るまで	筒美京平	LL-10065-J	A	日本コロムビア	28
	8		25	ザ・ジャガーズ	星空の二人	筒美京平	FS-1058	A	フィリップス	58	
	9		5	スパイダース	黒ゆりの詩	かまやつひろし	FS-1060	A	フィリップス	37	
	9		5	オックス	ダンシング・セブンティーン	筒美京平	VP-13	A	ビクター	28	
	10		15	ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	さよならのあとで	筒美京平	LL-10074-J	A	日本コロムビア	3	
	12		10	オックス	スワンの涙	筒美京平	VP-15	A	ビクター	7	
	1969	1	25	ザ・ジャガーズ	恋人たちにブルースを	筒美京平	FS-1067	A	フィリップス	82	
		2	10	ザ・ヤンガーズ	恋をおしえて	筒美京平	FS-1071	A	フィリップス	86	
		3	25	オックス	僕は燃えている	筒美京平	VP-16	A	ビクター	18	
		4	25	ジャッキー吉川とブルー・コメッツ	涙の糸	筒美京平	LL-10095-J	A	日本コロムビア	16	
		5		ザ・ジャガーズ	二人の街角	筒美京平	FS-1079	A	フィリップス		
		6	25	オックス	ロザリオは永遠に	筒美京平	VP-19	A	ビクター	32	
		7	15	ザ・ヤンガーズ	ジン・ジン・ジン	筒美京平	FS-1083	A	フィリップス	97	